

書評

田村 実造
小林 行雄 著

慶陵

京都大学文学部刊

一〇世紀のはじめから一二世紀の前半にわたつて、蒙古滿洲より南は華北、東は朝鮮、西はトルキスタンに及ぶ広大な地域を領有して活躍した契丹民族の王朝が申すまでもなく遼であるが、慶陵とはその最盛期をきつき上げた聖宗とそれに続く興宗・道宗の三代の帝王の陵墓の総称である。その位置は東蒙古、ワール・イン・マンハの慶雲山下にあり、そこにはこの三陵が東中西とほぼ東南面して並列している。

けだし慶陵が学界の注目をあびるようになったのは約三十年以前からであつて、ことに熱河の軍閥湯佐栄による発掘を契機として、その基礎的な調査研究は内外の要望となつた。昭和十四年、日滿文化協会が主となつて

調査隊を派遣することとなり、田村実造博士が主任となつてこの事業を遂行されるに至つたことは衆知のごとくである。

博士はこれより先（昭和六年）すでにこの地を訪れ調査に手をつけたのであつたが、再びここに赴き、綿密な調査に従われることとなつた。かくして本書は実にその成果であり、調査団の一員として協力された小林行雄氏との協同執筆になるものである。それは本文と図版とからなる上下二巻の巨冊で、副題に「東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁画に関する考古学的調査報告」とあるように、この遺跡と遺物に関する地図写真実測を初めこれに関する記述ならびに研究の一大集成である。

上巻は巻頭に羽田博士の序文を掲げ、著者らの緒言に続いて、七章からなる本文及び英文からなつてゐる。すなわち第一章では慶陵の歴史とその発見の経過を述べ、その位置や景観を記している。第二章から四章までは東陵についての記述で、墓室の形状構造をはじめ、その内部に画かれた人物、四季山水、或は建築裝飾などに關してであり、さらに殿門

址や遺物に及んでいる。第五章は中陵と西陵との遺跡・遺物を、第六章では慶陵から搬出された帝王皇后らの哀冊碑石の出土の経緯やその形態、さらに漢契両文の解説を行つてゐる。

例言で断つておられるように記述は三陵のうち東陵が主となつてゐる。それはこれが比較的破壊の程度少く、しかも比類のない壁画の存在といつた重要な価値にもとづく。かくて結論として三陵の比定を行い、東陵を聖宗、中陵を興宗、西陵を道宗の陵墓とし、その營造年代もまたその順序によつたものとされ、さらに慶陵全体を通じてみた遼代文化に論及され、その社会的基盤が遊牧騎馬及び農耕の生活にあつて、その上に立つ征服王朝は実に唐宋文化の摂取に努むると共に西方文化とも深い關係を持ち、しかもそこには独自の文化的性格を形成するに至つたものであると断じておられる。

その写真実測記述はわれわれ未だこの地を踏査するをえないものをして、恰もここに赴かしめるがごとく容易に理解せしめるべき周到さと懇切さとを示してゐて、そのことに對

し先ず敬意を表わずにはおられない。

思うにこの調査事業は単なる僻遠地の一場合であつたというばかりではなかつた。第一に附近の治安が悪く生命の危険をとまなうものであり、交通不便人迹を断つところであることは申すに及ばず、盛夏の候において、地上百度を越えその強烈な光線は目を射るばかりであるのに対し、墓廬内部は湿度多くしかも零下に近い寒さで、加えるに全く暗黒である。かかる悪条件のうちにあつて、短期間に調査の完了をせまられているのである。それらはこの種の調査に従事したことのある人々は直に理解出来る困難辛苦である。しかもまた未発掘の対象物ならいざ知らず、いわば盗掘の後始末といった精神的にも負担の大きいものであつた。しかもようやく原稿を成さんとするとき、整備された図版が戦災で焼失するというような打撃をうけられたのである。羽田博士も「それにも拘はらず、著者は意気沮喪せず、幸にも難を免れた僅少の原板と焼付写真の類を基にして再発掘の歩を踏み出し、遂に見事にその稿を完成したのであつた」と述べておられるのはよくその間の事情

を物語るものであらう。かくてその重要な意義が認められ、京都大学や文部省当局の援助のもとに昨年八月発刊を見るに至つたことは著者は固より学界特に東洋学のために喜びに堪えない。本春、朝日新聞社によつて文化賞が贈呈され、その労苦と功績とにむくいられたことはまことに當を得たものといふべきである。

そもそも一般に、史蹟調査報告と名付けられるものは、乾燥無味のもの多く、当事者以外には実に資料的価値の提供に止まる場合が少くない。しかるに本書は調査対象が帝王陵というごとき内容の豊富なるものであるから、単にこれを確実な遼代文化資料として見るだけでも重要であるのは勿論であるが、一層読者をして興味をよび起さしめるものはこれが単なる考古学的な調査報告にとどまつていないという点である。著者らの有する該博

な知識、すなわち一般遼代史をはじめ中国建築史・絵画史・工芸史或は風俗史、さらに漢文学や契丹文字というごとき特異な言語に対する深い造詣がいたるところ窺われる点である。例えば難解な营造方式を初め各種の文献

を自由に引用し、参考写真や挿図を豊富に使用し、特に漢字の哀冊文などに対して一々詳細な註釈考証を行つていふときである。とりわけ壁画については貴重な原色写真を多数収めると共に彩色を用いて人物山水装飾などの構図や配置の図を掲げ、さらに契丹人物の服飾に関する考証とか、山水については植物禽獸が悉くこの地に実存しているものである、この情景が慶雲山附近を現わしたものであるとしてゐる。さらに四季図の描かれた理由について、これが漢六朝時代に盛行した四神図と同じ意味をもつものであると断じておられることなどその一端である。なおまた契丹文字のごときわれわれの全く窺いえないようなことについてもとくに概説されその大略を理解せしむる用意を払つてゐる。

元来多岐に互る専門分野にあつてはそれぞれの専門家が相密つて記述するのが例である。しかしその弊たるや往々編輯書に墮して、綜合性と一貫性を缺く憾みが多いのである。しかるに本書はその綜合性と一貫性を兼ね、さながら遼朝文化史をひもどくがごとく、しかも文章は秀抜であつて、専門外の

人々に対してもまたうましめないものがある
と信ずるのである。

なお蛇足ながら、この陵墓の副葬品につ
いての疑問について触れてみよう。はしがき
には「大規模に開掘され、墓室内にあつた皇帝
皇后の哀冊碑石をはじめ副葬品の類までもこ
とごとく運び去られたことを知つた」と述べ
ておられるが副葬品の存在は果して如何なる
程度であつたか。遼朝滅亡後、中国歴代の場
合のようにこれら帝王陵もまたことごとく発
かれ、寧ろ湯氏はその最後の人であつて、そ
こには殆んどめぼしい副葬品の類はなかつた
のではあるまいか。さらに契丹文字について
の望蜀としては、「接尾語として用いられた
契丹文の類別表」に合せてわれわれ門外漢の
ために契丹名詞対照表のごときを作成して
いただいたかつた。〔座右宝刊行会發行 菊信
版 定価二五、〇〇〇円〕

——小野勝年——

堀 一郎 著

我が国民間信仰史の研究

吾国の民間信仰史に關しては断片的には既

に多数の研究が公にされているが、之をまと
めて全体的に展望しそこから理論的な体系を
帰納する事は今日迄行われて来なかつた。一
般に庶民階層の生活が歴史研究の視野に大き
く入つて来たのは言う迄もなく文化史研究の
結果から必然に導かれたものであるが、この
階層は常に歴史の底層をなすという正にその
理由によつて所謂文獻史料の中にその姿を直
接現わす公算が少く、従つて之に對する実証
的研究はそこに方法上の原理的な障礙を背負
はされていたのである。近代民俗学の勃興し
て来た最大の理由の一も突にこの隘路を開闢
する事にあつたのであるが、然しこの側に於
ては未掘資料は寧ろ無限に近く、今日迄の民
俗学は主としてこの無數の伝承資料の発掘と
整理に目標をおいて来たのである。複雑多岐
を極める常民生活史に透徹した体系を与える
ためにはそうした民俗学の豊富な資料と方法

を駆使しつつ他面に於て尤大な文獻史学の成
果を消化し更に広く世界の未開民族に關する
知見の裏付けを要する点に於て、その作業は
単一の学問的方法にのみ立脚すれば足りる研
究に比して格段の困難を含んでいる。今回上

梓された堀教授（東北大学宗教学）の七五〇
頁をこえる近業は伝承の基幹をなす民間信仰
についてそうした幾多の困難をはじめて克服
した力作であつて、その内容は宗教史の本領
から更に広く文学史・民俗史・社会思想史等
にも関連し民俗学・民族学・文化人類学等も含
んで広義の歴史学多年の渴を癒すものである。
深い洞察と含蓄は本書が東京大学に提出され
た学位論文であるというに相応しい。

堀氏はさきに國民精神文化研究所にあつて
昭和十五年以來「日本仏教史論」「日本上代
文化と仏教」「日本上代仏教文化史」「伝教
大師」等の著書によつて主として吾国上代仏
教について次々と斬新な創見を世に送られつ
つ、柳田国男氏の学風に接近しては逸早くそ
の精髓を体し昭和十九年「遊幸思想——國民信
仰之本質論」の好著を物され続いて昭和廿六
年の「民間信仰」（岩波全書）に於ては民間
信仰と常民社会との関連面に純民俗学現在の
水準を示されているが、今回出版された本書
の序文によれば、元來「遊幸思想」本書「民
間信仰」（岩波全書）の順に執筆された三部
作であつて、その中近く出版予定の「遊幸思